

—最終講義—

私の研究生活

川崎医科大学内科学（呼吸器）教授 松 島 敏 春

このたび65歳の定年を迎え、31年間勤務した川崎医科大学を退任することになりました。本日、最終講義をするに当たり、私がどのような研究を行ってきたかについて、お話をさせていただきます。

私が熊本大学医学部を卒業したのは1964年、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開業した年です。40年前のことで、古い昔のこととなりました。

卒業後、北九州市の九州厚生年金病院ならびに黒崎保健所でインターンを致しました。文字通りのインターンで、病院敷地内の寮で12名が共同生活（2段ベッド3個、机は各自、の部屋が2つ）をし、24時間勤務に近いものでした。臨床的には存分に鍛われたといえますが、厳しい修練でしたが、充実した研修生活でした。

インターン終了後、母校の第一内科へ入局し、大学院へ進学いたしました。大学院で私に与えられた仕事は、癌の肺転移や発癌に関する実験でした。この仕事を学位論文「Experimental studies of blood-borne metastasis and induced tumor in injured lung. Kumamoto Med J 22: 83-98, 1968」として纏めました。

当時、癌の研究で先端的な分野の一つが細胞遺伝学でした。静岡県三島市の国立遺伝学研究所細胞遺伝部へ特別研究生として約1年間お世話になりました。ここでは吉田肉腫細胞の染色体を研究し、「Change of stemline karyotypes in Yoshida sarcoma by appearance of peculiar

marker chromosomes. GANN (現在の Cancer Science) 62: 389-394, 1971」として纏めました。

遺伝学研究所から熊本大学へ帰り、診療の傍ら染色体の実験を重ねておりました。染色体の染剤を作成中氷酢酸を突沸させ、目が見えなくなるというハプニングもありました。現在も結膜、角膜が悪いのはそのため、家内の誕生日で実験を早く済まそうとしたのが悪かったのです。実験は常にじっくりと、寄り道をしながらでも行うべきものです。

1973年に新設の川崎医科大学へ副島教授とともに赴任いたしました。

癌は癌細胞が2分裂しながら無制限に増殖するものです。したがって、カリフラワー様と称される塊を作るのです。肺癌の場合は胸部レントゲン写真で結節影を呈します。ところが、塊（結節影）を作らず、のっぺらな、肺炎みたいな陰を呈する肺癌を経験しました。そのような症例をまとめて発表しましたし、経気管支的に転移するのではないかと考えました。その可能性を動物実験で確かめようと試みたのが安達先生の実験であります。

正常な上皮をもっている場合は経気管的に腫瘍細胞を吸引させても生着しませんが、あらかじめNO₂に暴露させ、上皮を傷害させておくと転移が形成されます。それをまとめたものが安達先生の学位論文「NO₂暴露マウスにおける吸引エールリッヒ細胞の生着に関する実験的研究—癌の経気道性転移に関する考察—。肺癌

